

著作権 保護

岩手の歴史

なぜ？ どうして？

目次

道奥国と呼ばれたのはなぜか	1
どうして富民が大挙入植したのか	5
アテルイは、なぜ殺されたのか	9
どうして志波城が北限の城となったのか	13
前九年の役は、なぜ起きたか	17
なぜ後三年の役が起きたのか	21
平泉文化は、なぜ黄金文化になったのか	25
義経は、なぜ平泉に来たのか	29
なぜ大河兼任の乱が起きたのか	33
北畠顕家は、なぜ奥州統治者になったか	37
南部守行が、津軽、秋田の安藤氏と戦ったのはなぜか	41
蠣崎一揆は、どうして起きたのか	45
九戸政実は、なぜ乱を起こしたのか	49

- どうして葛西・大崎一揆が起きたのか……………53
- 和賀・稗貫一揆始末……………57
- 南部氏は、どうして近世大名になりえたか……………61
- 阿曾沼氏は、なぜ滅んだのか……………65
- なぜ後藤寿庵は姿を消したのか……………69
- どうして盛岡城に虎がいたのか……………73
- 南部弥六郎が遠野へ配置替えされたのはなぜか……………77
- 留守氏が水沢城主になったのはなぜ……………81
- 栗山大膳は、なぜ盛岡で死んだのか……………85
- どうして方長老は盛岡に流刑されたのか……………89
- なぜ田村氏が一関藩主になったのか……………93
- 南部藩が盛岡と八戸に分かれたのはなぜか……………97
- 岩手山は、いつ頃から、どのように噴火したか……………101
- 松尾芭蕉は、なぜ平泉から引き返したのか……………105
- なぜ浅野内匠頭は一関藩邸で切腹させられたのか……………109

- どうして一関藩医が死体解剖できたのか……………113
- 伊能忠敬いのうただたかは、なぜ三陸地方の測量をしたのか……………117
- 択捉島事件エトロフは、なぜ起きたか……………121
- どうして盛岡城下で米騒動が起きたのか……………125
- 相馬大作は、なぜ津軽侯を狙ったのか……………129
- なぜパラオ島漂着民は生還できたのか……………133
- 三閉伊一揆は、なぜ大規模になったのか……………137
- 高野長英は、なぜ自刃したのか……………141
- なぜ吉田松陰は、盛岡を訪れたのか……………145
- 三浦命助が獄死したのはどうして……………149
- 盛岡藩は、どうして百姓制約令を出したのか……………153
- 盛岡藩が秋田戦争を戦ったのはなぜ……………157
- どうして南部氏が白石に転封されたのか……………161
- 榎山佐渡は、なぜ刎首ふんしゅの刑になったのか……………165
- なぜ鍵屋茂兵衛は尾去沢銅山を奪われたのか……………169

著作目録

どうして国民皆名字になったのか……………	173
真田 <small>まんだいこ</small> 太古事件は、なぜ起きたのか……………	177
ホルワルド・ホー号漂着が、なぜ大事件に……………	181
なぜ三陸大津波が大惨事になったのか……………	185
八甲田雪中行軍が、どうして悲劇になったか……………	189
横川省三・スパイ事件は、なぜ起きたのか……………	193
なぜ原敬は暗殺されたのか……………	197

道奥国と呼ばれたのはなぜか



東北の古い呼び名が「陸奥国」で、そのヤマト言葉が「みちのおく」、略して「みちのく」であることは、よく知られているところである。西行や芭蕉の思いに結びつく「みちのく」など、歴史の中のイーハートープのように、ロマンの別名のごとくに空想化された名前になっている。

私たちは、「エゾの国」の意味でもこの言葉を用い、「ロマンの国」のつもりでも、この言葉を口にする。そして、それが東北なのだと思っている。あたかも、朝は和食、夜は洋食、それでよいのではないか、といったのと同じ

趣で、それを受けとめている。少しの不思議も変哲もない。

私は、東北の本当の意味の不思議、「道奥なぜ」の急所は、むしろこのところにあると思っている。なぜ「エゾの国」が「ロマンの国」なのか。そういう白と黒ほどの違いが、白も黒も一緒という不思議を問題にしないおおらかさの方が、なぜ「道奥」と呼ばれたかの理由より、もつともつと問いただいたい不思議なのである。

この「なぜなぜの体系ふしぎの国」として、東北は、あるいはわが岩手の国は、今日もなお、ナゾの中にある国と言ってよいのである。

「道奥国」。この言葉の前に「日高見国」という呼称があった。これが東北自身の言葉による東北の自称のように考えられてきた。私も、そう考えてきた。しかし現在は、このヒタカミというのも、道奥というのと、あまり異なるところのない他称、ヤマト側からの呼称と考えざるを得なくなっている。そして、東北自身の自らの呼び名は、ついに不明ということになる。そこに「られる国東北」の、歴史の業ごうにも似た性格がある。

ヒタカミの言葉に、「日高見」の漢字を与えたのは、ヤマト側が、この外の国をその国づくりにあたって都合のよいように組織する意図に出た好字の適用であった。ヒタカミは、本来ヒナカミすなわち鄙上ひなかみのこと、鄙上は鄙境ひなほとりつまり、「辺境」の意味だったのである。そしてこれは、東国をアズマと呼んだのと、同じような呼称の適用だった。

アズマは、「明端」すなわち「日出ずるほとりの国」の意味で、東国の義になるといわれるが古来の通説だった。私は、これをアマツマ「天端」と考え、「天ざる鄙」の意味と理解する。東北は、その「天ざる鄙の国」のアマツマよりさらに奥の「辺境の国」としてヒナカミの国だったのである。ヒナカミの国は、ヤマトの国の外に、もう一つの独立の国を構えて、統一国家の内に入ることを、頑強に拒んでいる広大かつ強大な国であった。ヤマト側は、これを完全に統一国家のなかに編成しなければスメラミクニ（天皇統一国家）にならないという考えから、「大倭日高見の国」を安国とすることを国家の大方針に掲げ、祝詞などでもそう宣言しているのであるが、それは理想にとどまり、現実には厳しい敵国、別国家として、外に立ち続けることになる。

ヤマト国家は、アズマやヒナカミが東の果ての国として、そこが言葉の上でも「日の本の国」「日辺の国」の意味になり得ることを知っていた。「日高見国」の称も、そうして起こった。「日上」という書き方もそれに基づく。「唐書」などによれば、六、七世紀のころ、わが国には倭国（ヤマト国家）のほかに、これに対立する国として「日本国」というのがあったとしているのは、この東辺のヒナカミの国の漢語表現と考えるよりほかない。

ヤマト国家は、国内のこの「日の本の国」の称を、対外的な新国号にして「倭国」のイメージ・チェンジを図ろうとする。大化改新のころ、七世紀半ばのころのことである。

そうなれば、国内において、この国号と同じ名前が行われることは許されない。日高見国という公称が消えて、「道奥国」という国名が制度上の称として成立するのは、倭国という名のヤマト国家が、日本国という名のヤマト国家に国号を改めるのと同じ大化改新のころ、七世紀半ばごろである。「道」は「国」の意味であり、政治の組織化のことを指すから、「道奥」は「国の外」「支配の外の国」の意味になって、ヒナホトリということを漢語風に言い直したものであることが分かる。

その「道」は「東海道」「東山道」の「道」でもありうるが、原日高見国だった常陸国のヒタチが「日高見道」の略と考えられていることから、「道奥」は「日高見道奥」すなわち「常陸道奥」という考えもありうる。道奥への最初の主たる開拓ルートは常陸だった。

国名は好字に統一する方針から「道奥」は七世紀終わりごろ、おそらく天武朝の飛鳥浄御原律令制あたりで「陸奥」と改められた。平安朝に入り、中国趣味のもとに、陸州とか奥州とかいう呼称が盛んに行われるようになり、さらに「陸州」を「六州」「六国」などと書き表すようになって、「むつ」というような訓みを生ずるようになる。

他方「みちのおく」は、「みちのく」になるだけでなく「みちの国」というふうにもなる。これも「陸州」の国訓のうちである。「奥の国」と言わないで「道の国」とするあたりから空想みちのくのローマン化が始まる。

(高橋 富雄)

どうして富民が大挙入植したのか

奈良時代の正史『続日本紀』は、東北地方大規模開発記事の事始めとして、靈龜元年（七一五）五月三十日条に、こう記している。

「相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野六国の富民千戸、陸奥に配す」。

これは、いわゆる柵戸記事である。柵戸は、キヘ・キベ・キノヘなどと読み、古代、東北辺境開拓のために、城柵周辺に配置されて、城柵の設けに守られながら開拓に従事するとともに、非常のことがあれば、自らも兵に協力して防衛にも当たった武装開拓移民のことをいう。明治の北海道開拓のための屯田兵に似たような植民である。

七世紀末から八世紀初めころには、西辺の隼人などの征討、及び防衛のために営まれた城柵施設にも、この種の開拓民が伴ったことが知られているが、この種植民が主として問題になるのは、古代東北（新潟を含めて）である。それは、日本古代史上、軍事経営を伴う開拓は、古代エゾの国・東北にはほぼ限られていたことの表れでもある。

柵戸という植民たちによる古代東北の開拓は、いくつもの特色を持った。

(一) 柵戸というのは、すべて他国からの移民の形をとる。時代が進むにつれて、越後国・出羽国から陸奥国への入植ということもあった。同じ陸奥国でも、南の先進諸郡から新開の辺郡への移民ということもあった。しかし、基本は内国（先進国）からの入植である。こうして、エビスたち地元中心でなしに、ヤマト系内民たち中心の国づくりになるというところに、この柵戸経営の意義があった。

(二) 他国といっても、柵戸の出身地には、はっきりした限定があった。それは、歴史上、東国と呼ばれた地域の国民にほぼ限られ、さらにそれは防人さきもりと呼ばれた軍役を担った人たちの出身地とも全く重なってくる。これは、古代の軍役及びこれに伴う国家労働は、東国の特別徭役ようやく（雑徭ざうよう）だったことを示している。東北開拓は、半ば軍役、半ば拓殖の、まさに兵農一致の典型的な重労働として、東人あづまびとたちに課せられた責務であった。その範囲は、越前（福井県）と尾張（愛知県）を西限として、大体は遠江（静岡県）以東の東海道、信濃（長野県）以東の東山道に集中する。歴史の東北は、こうして「第二東国」「東国コロニー」として成立することになる。

(三) 辺境開拓は、寒冷の北国と戦い、強力なエビスと戦いながらの国づくりである。最も困難な建設の戦いである。政府は、これを安定した開拓にするために、農民の中でも、生活の安定した有力農家からすぐって、柵戸を送り出したのである。これが古代の東北開拓

が、幾多の難関に直面しながら、終局の成果をあげることのできた一番の理由である。しかし、このために軍事経営の兵力動員に加えて、有力な働き手を柵戸に徴発されて、東国では農家経営が成り立たなくなっていると、深刻な農家危機を訴えるような事態も起こってくる。東北経営は、この点からも「坂東の安危」「東国の治乱」を分ける国家問題であった。

四富民を送り出すことが、他方で内国農家の安定した基盤を破壊する原因となるところから、政府はここに別な柵戸方法を案出するに至る。浮浪民を狩り出して、これを辺境開拓民に強制移住させる。犯罪人の徒刑・流刑の場として、柵戸制を再編するようになる。これは内国における社会問題を解決するには妙案だった。しかし、そのために辺境は、浮浪民や犯罪人たちの巢窟のようになり、開拓にならないばかりか、前門に虎を追って、後門に狼を迎え入れる結果となった。

古代中ごろから、辺境は、ひとりエビスだけが騒乱の元凶になるだけでなく、柵戸に配された人たち、これに結びつく「無法者たち」による騒擾さわじょうもまた慢性的になっていくのである。

(五)東国の富民一千戸の移配に前後して和銅七年(七一四)十月二日には、尾張・上野・信濃・越後の国民二百戸、養老元年(七一七)二月二十六日には、信濃・上野・越前・越

後四国の百姓各百戸計四百戸を、ともに出羽柵に配している。このような大規模移民の中の最大規模のものは、延暦十五年（七九六）十一月二十一日の、相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後等の国民九千人を、伊治城（宮城県栗原郡築館町）に移配している例である。

遅々としてはかどらなかつた開拓が、こういった大規模開拓民の集中入植という政治措置によって一挙に活気づいてくることは否定できない。坂上田村麻呂の大軍事行動は、十万というような空前の兵力動員としても画期的であつたが、この伊治城九千人柵戸移配に見るように、開拓の強力プッシュという点でも画期的であつた。

(六) わが岩手県での貴重な柵戸記事は、胆沢城に関するものである。延暦二十一年（八〇二）正月十一日、駿河・甲斐・相模・武蔵・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野等の国の浪人四千人を胆沢城柵戸に配している。浪人とあるから富裕の良民移配とは異なる。しかし、四千人の数は伊治城九千人に次ぐものである。田村麻呂政治の意気込みがうかがわれる。胆沢城下の江刺郡には信濃・甲斐の、また胆沢郡には下野の各郷があつた。これは延暦二十一年集団移住の名残であろう。柵戸開拓の名をとどめた貴重な村の名前である。

（高橋 富雄）



鹿島神宮(茨城県)に伝わるアテルイの面

アテルイは、なぜ殺されたのか

大墓公阿弓流為。私は、この公姓は、大萬公の誤りと考える。江刺市東部に大萬館の名を残すのは、その名残であろう。オオマノキミ・アテルイとよんでおく。もう一人、彼と共に延暦の胆沢会戦で胆沢エビス連合軍の指導者になった首長に盤貝公母禮がいる。これについては姓名ともに誤字があり、盤貝公母禮の書き誤りと考える。イワガイノキミ・モタイ。そうよんでおく。「江刺市史」にその考証を示しておいた。

アテルイは、延暦八年(七八九)の胆沢会戦で、五万三千人の政府軍を北上河西の地に